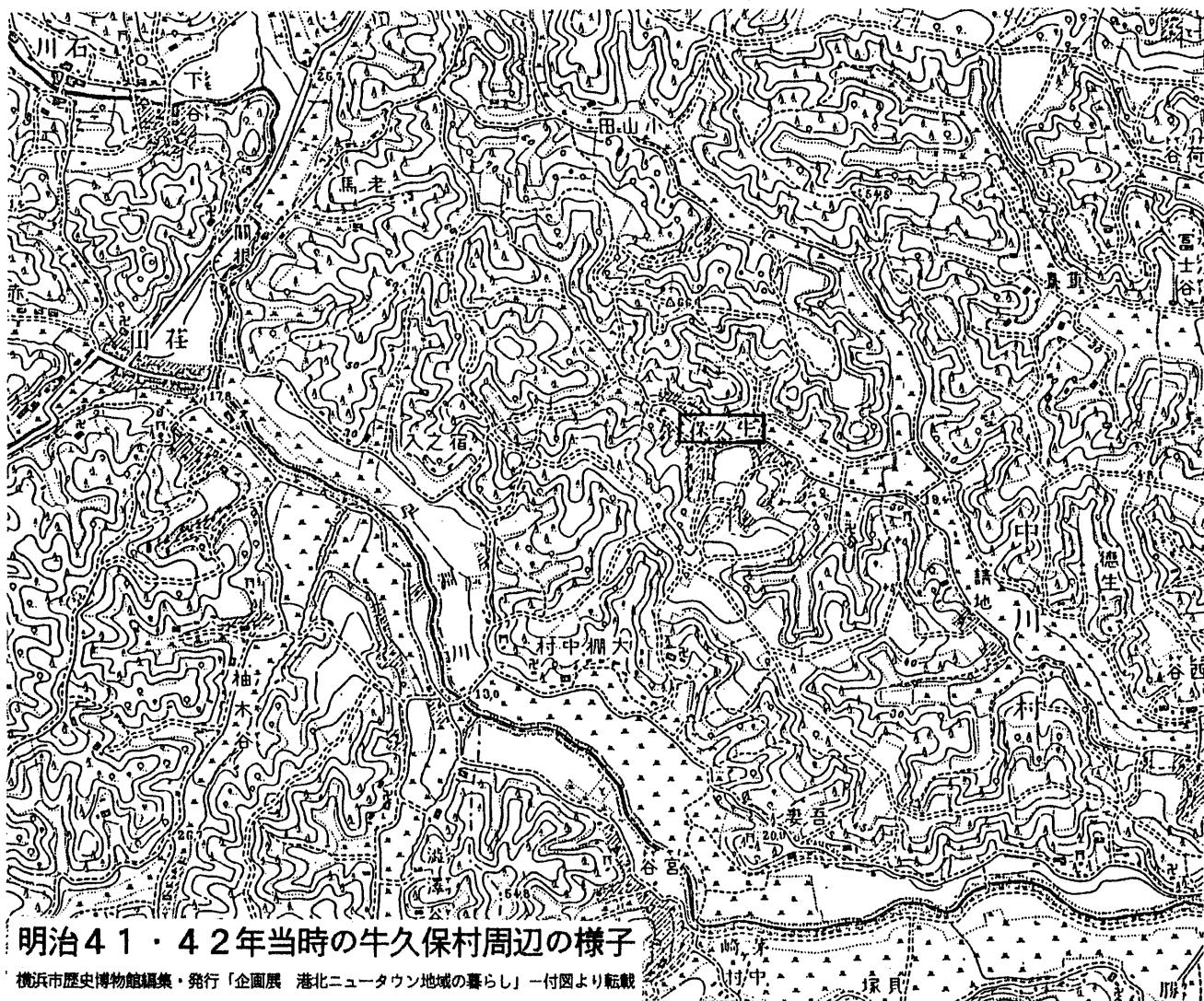


第一章 概 說

牛久保村の概況と長沢家

旧長沢家主屋がかつて建てられていた場所は、神奈川県の東北部をなす都筑郡牛久保村で、横浜からは北に約四里半の距離にあたる。明治期には周辺の山田、大棚、勝田、茅ヶ崎を併せて中川村を形成していた。明治35年（1902）に行われた調査資料によって旧牛久保村の地勢をみると田が18町5反7畝9歩、畠が42町6反9畝6歩、宅地3町6反4畝26歩、山林66町5反1畝8歩で合計で131町4反2畝17歩であったことがわかる。このなかに73軒。人口は奉公人や雇人まで含めて男女併せて417人が暮らしていた。以上は明治35年に調査した数字であるが、それより31年ほど前の明治4年（1871、廃藩置県の行われた年）の資料では牛久保村の戸数は57戸、人口は419人であった。さらに明治4年の資料には村全体で20頭の馬がいたことが記録されている。しかし牛の飼育は記録が無い。



明治35年の資料「神奈川県都筑郡中川村々是」でも判るように、旧牛久保村は水田が少なく、畠地や山林の多い土地柄であった。明治期のこの地域の地図をみても谷と書いてヤトとよむ地名が数多くみられる。この谷戸を開いて水田とし、水田の周囲の山を開いて畠地に変えてひとが住んでいたのがこの地域の姿といってよく、当時の地図でみると丘陵の麓々を細長い水田が谷戸の奥まで続くといった地形がいたるところに読み取れる。1戸平均3反2畝の水田面積では稻作農村というよりもむしろ畠作中心の農村であったと考えられる。

旧長沢家は牛久保（牛窪とも表記されていた）村で谷戸田に南面した斜面の裾に屋敷を構えていた農家であった。屋号を「中村」という。いつの頃からこの地の住み始めたのかは明らかではないが、長沢家の所蔵文書の中に「文禄三年（1594）武藏国都筑郡牛久保村古水帳－寛保三年（1743）写」や、「寛文十二年（1672）武藏国都筑郡牛窪村水帳－延宝九年（1681）写」（3冊）があり、それらの資料から長沢家が元禄年間に牛久保村の組頭を勤め、さらに寛保元年（1741）から安永年間（1772～1780）頃まで名主を勤めていたことが明らかになった。

屋敷内には茅葺きの主屋の他に茅葺きの馬屋、その東方に同じく茅葺きのシモヤが建ち、主屋の南西側には物置（鉄板葺き）が建てられ、さらに新たに車庫が建てられ屋敷を構成していた。残念ながら主屋などの建築年代を記した資料は発見されていないが、後述する建物の特色から推定して主屋の建年代は18世紀中葉よりやや下ったころと考えられる。後世の増改築がほとんどなされておらず、創建時の姿をそのままに伝えている数少ない遺構であり、当時の生活を知る上できわめて価値の高い建物である。

旧長沢家住宅の主屋と馬屋は 長沢助夫氏により将来修理復原することを条件に昭和54年横浜市に寄贈され、部材は一旦解体保存された後、平成7年7月より17ヶ月の工期をかけて都筑区大棚町の現在地に横浜市歴史博物館野外施設として移築復原された。

第二章 建物概要

1. 規模および建坪

旧長沢家住宅の主屋および馬屋の創建時の規模ならびに建坪は以下のとおりである。

解体前の建物の規模については大規模な改造がなされていないことから修理後の規模と同様である。建坪については軽微な増築がなされており、以下に示す数値であった。

規模 (修理前、修理後とも同じ)

主屋部分	梁行 4.5 間	8,181 mm
	桁行 10 間	18,180 mm

馬屋部分	梁行 2.5 間	4,545 mm
	桁行 3.5 間	6,363 mm

建坪 (修理前)

主屋部分	57.91 坪	191.41 m ²
馬屋部分	8.75 坪	28.91 m ²
ロウカ部分	2.35 坪	7.79 m ²
合計	69.01 坪	228.11 m ²

建坪 (修理後)

主屋部分	51.25 坪	169.38 m ²
馬屋部分	8.75 坪	28.91 m ²
ロウカ部分	1.36 坪	4.49 m ²
合計	61.36 坪	202.78 m ²

a. 各部の寸法

ここでは修理後の建物の主要な寸法を示した。

(修理後)

主屋柱間芯々寸法 (1間寸法)	1,818	mm
主屋床高 (礎石上端よりヒロマ床板上端迄)	576	mm
主屋南側桁高 (礎石上端より桁上端迄)	3,787	mm
主屋北側桁高 (礎石上端より桁上端迄)	2,969	mm
主屋内法高 (敷居上端より鴨居下端)	1,818	mm
主屋棟高 (礎石上端より棟木上端迄)	7,059	mm
主屋茅屋根勾配	9寸	
馬屋平側柱間芯々寸法 (基本柱間寸法)	909	mm
馬屋妻側柱間芯々寸法 (基本柱間寸法)	1,136	mm
馬屋南側出桁高 (礎石上端より出桁上端迄)	2,445	mm
馬屋北側桁高 (礎石上端より桁上端迄)	3,055	mm
馬屋棟高 (地盤礎石上端棟木上端迄)	5,827	mm
馬屋ヒラ側茅屋根勾配	10／10	

b. 建物概要

主屋は土間回りおよびヒロマに改造が見られた程度で建物の概要是創建時に比較して大きな違いはなかった。ここでは主屋、馬屋およびロウカ部分の復原概要について示した。

主屋部分

石場立て 折置組 真束を持つサス構造 壁荒木田土中塗り仕上げ
寄棟茅葺四方葺下し 棟竹簾の子抑え

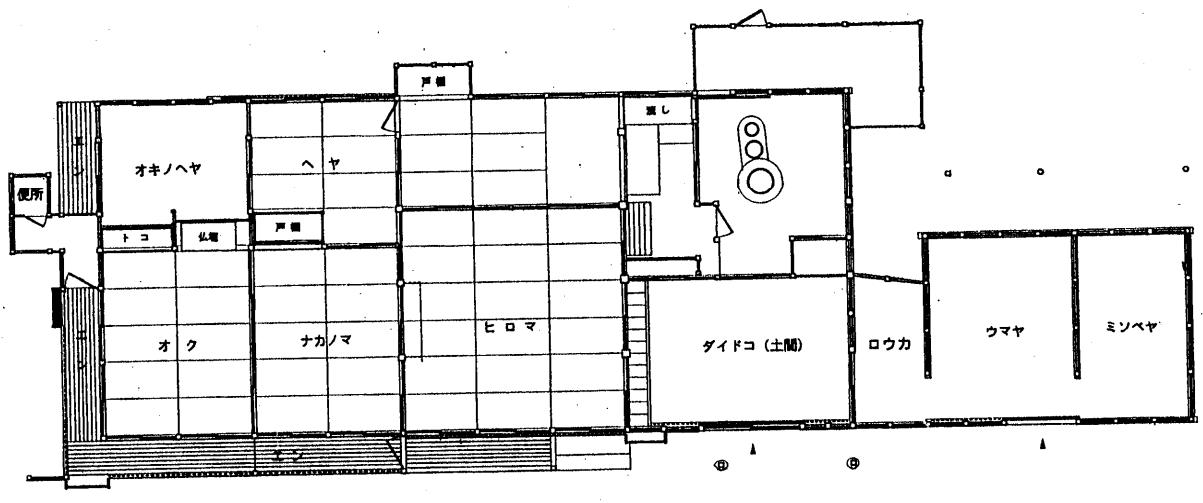
馬屋部分

土台上に柱立て 折置組 真束を持つサス構造 壁荒木田土中塗り仕上げ

寄棟茅葺四方葺下し 南面のみ出桁造り 棟竹簾の子押え

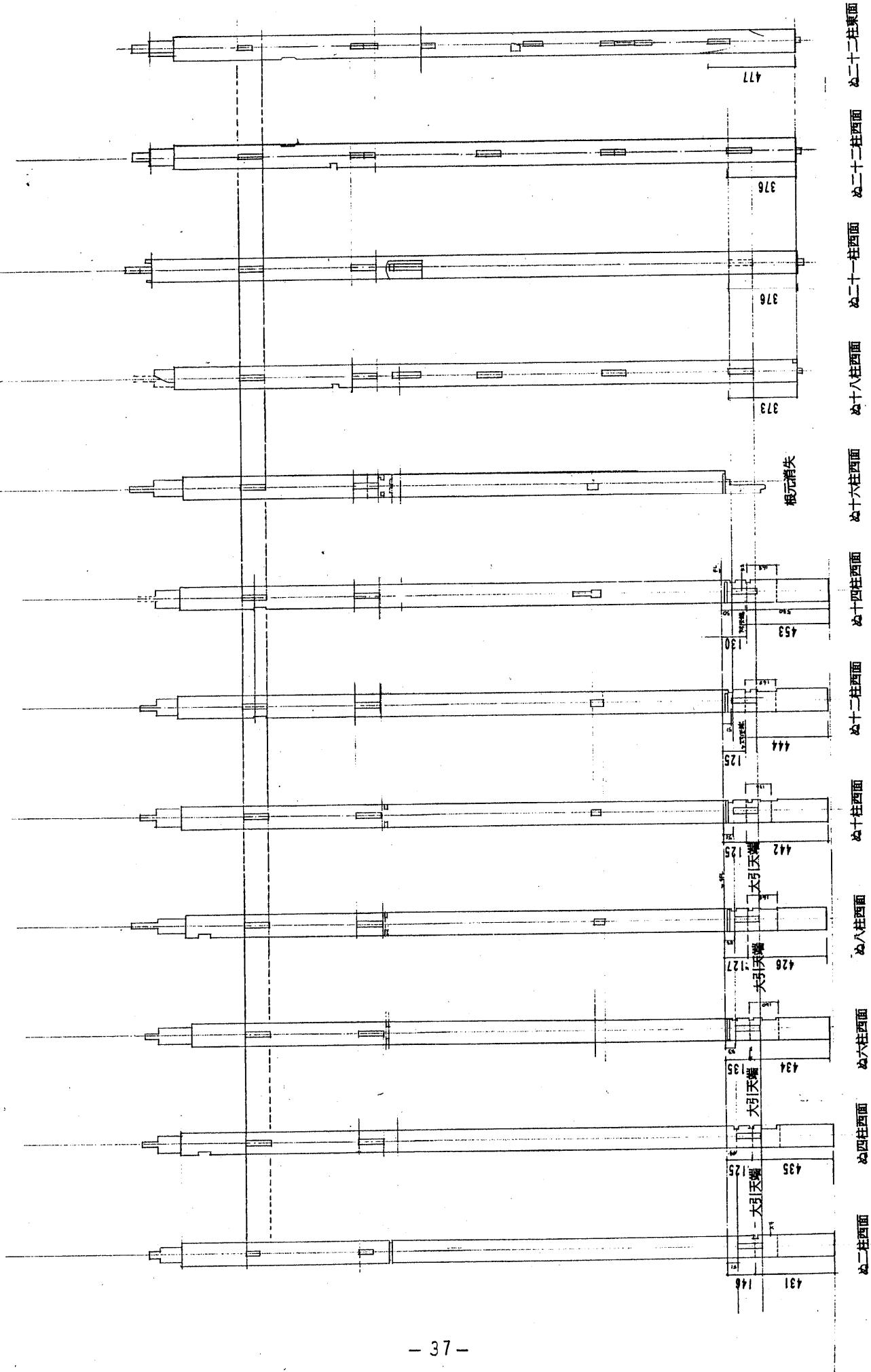
ロウカ部分

石場立て 垂木構造 切妻杉皮葺き竹押え 壁荒木田土中塗り仕上げ

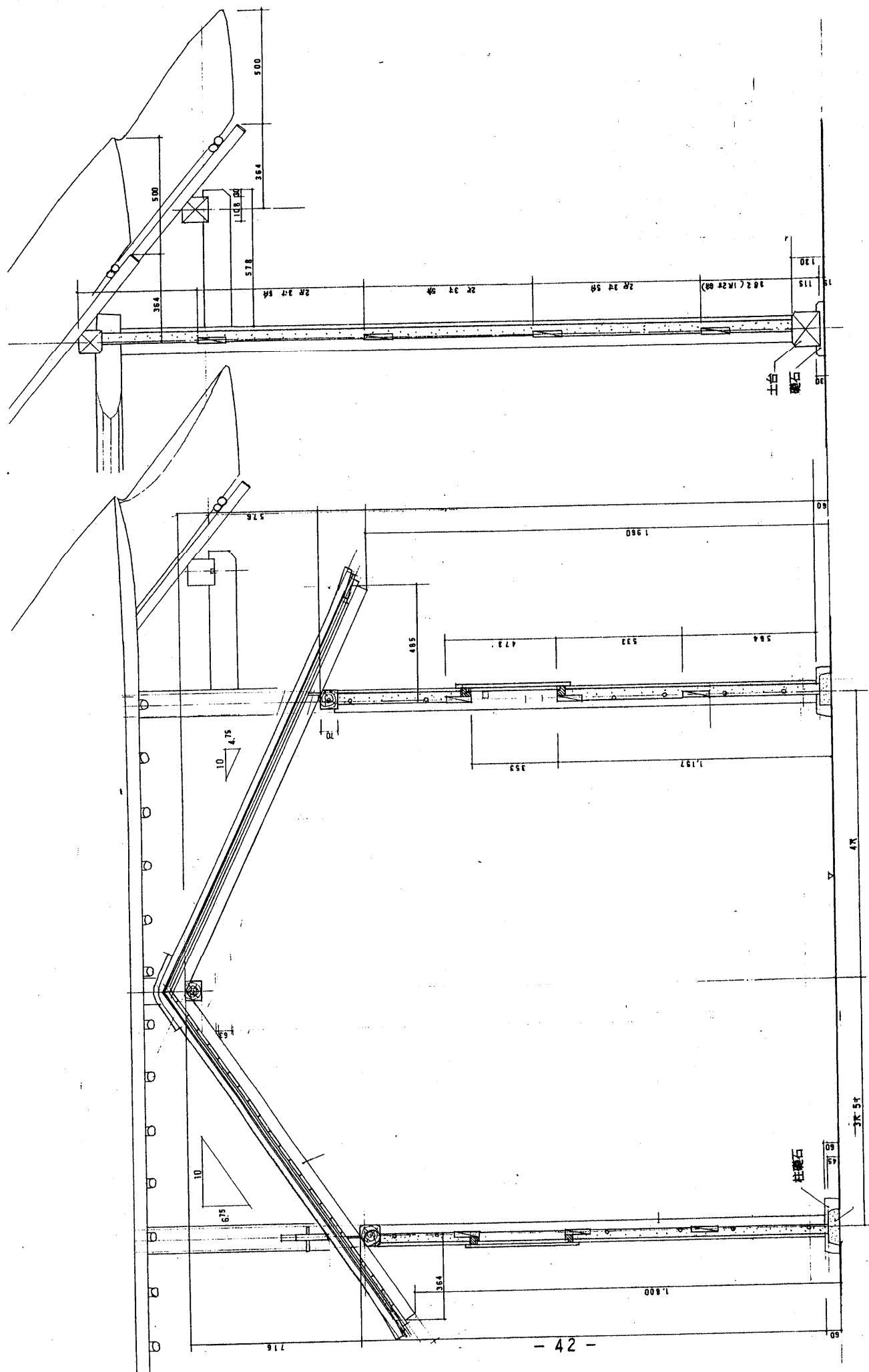


解体前平面図

主屋南側柱（ぬ通り）の比較



馬屋規矩図



ロウカ力復原断面図

ハ. 腐朽箇所の再調査

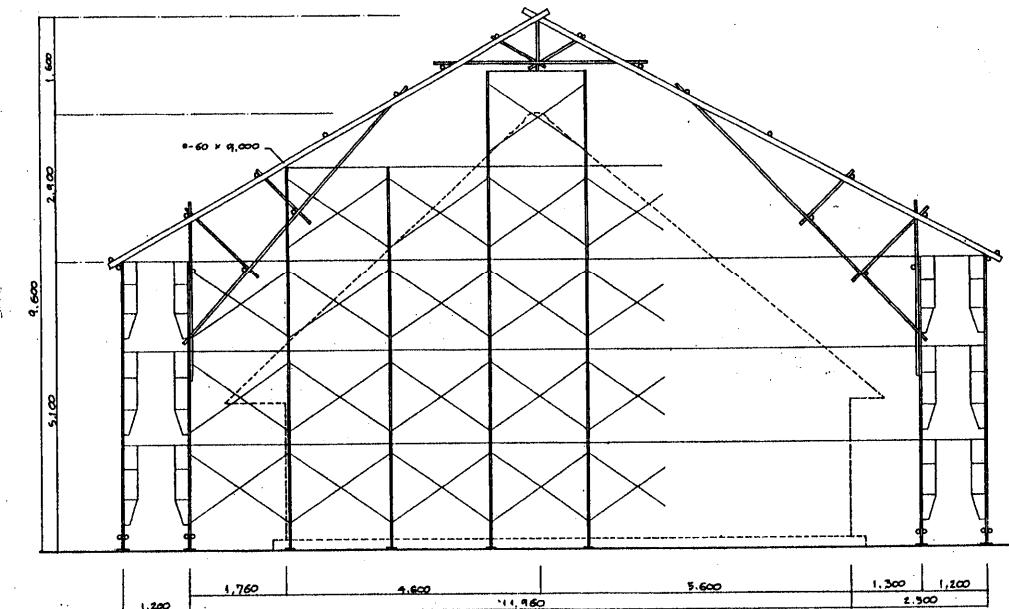
下小屋に搬入後の部材の再調査は、まず解体番付を確認し、ついで腐朽箇所の有無を調べた。部材に腐朽箇所が発見された場合はその範囲をつぎのような方法で調査し、そのつど修理方法を検討した。

- ① 目視により腐朽状況、虫害状況を確認した。
- ② 木槌または ハンマーで部材の表面を叩いてみて音の変化によって部材内部の腐朽状況を調べた。
- ③ 電動ドリルに3mmドリル芯を取り付け、部材表面に穴を穿け、その際の抵抗の変化から部材内部の腐朽状態を判別した。

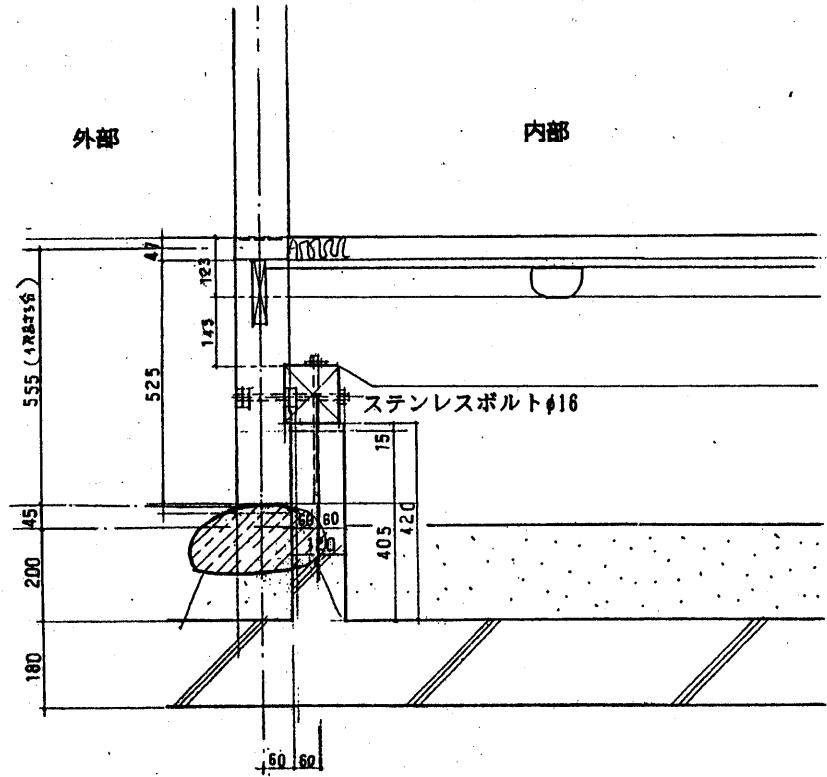
二. 基礎工事

a. 地盤改良

建設予定地となつた都筑区牛久保は小高い丘と谷戸が連なる丘陵地帯で中でも旧長沢家の復原位置は、もとは丘陵の中の小さな谷戸を造成して平らにした場所であつた。それも旧主屋の復原位置の西半が切り土、ウマヤ側の東半が盛り土を行つて平地を造つたという地耐力的にはきわめて安定の悪い条件での復原工事であつた。そこでそのため地盤の支持力を均一化し建物の不同沈下を防ぐ目的で、建物直下の地盤改良を行つた。その仕様は、



素屋根構造図



主屋柱の補強図

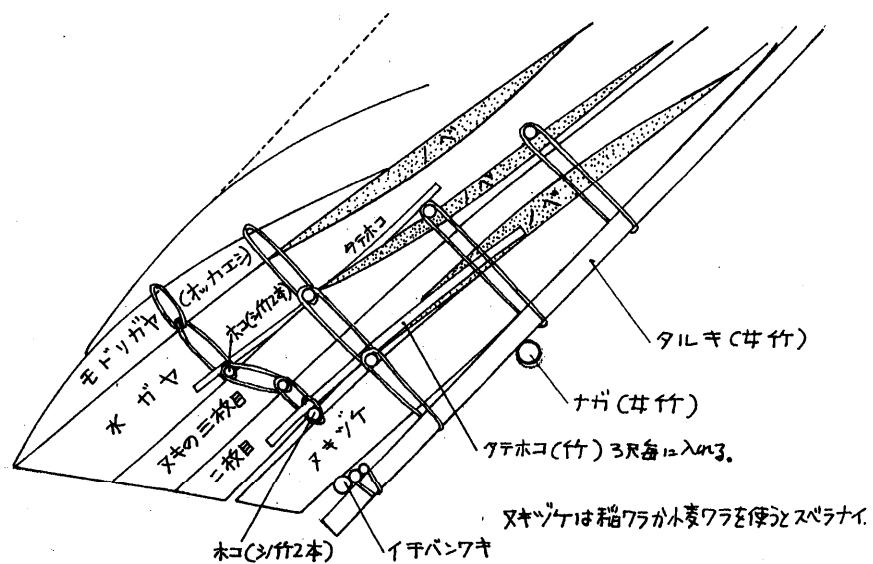
c. タルキ竹

タルキ竹は元口径45mm～55mm程の真竹を用い、4尺間に配された力垂木の間に5本（約200mm間隔）の割合で置かれた。タルキ竹の軒先の出は力垂木と同様で、節下が軒先になるように配置し、将来ずり落ちないようにハナモヤに釘止めとした。タルキ竹が1本で棟まで達しない場合には先と元を重ねて2本繋ぎとした。

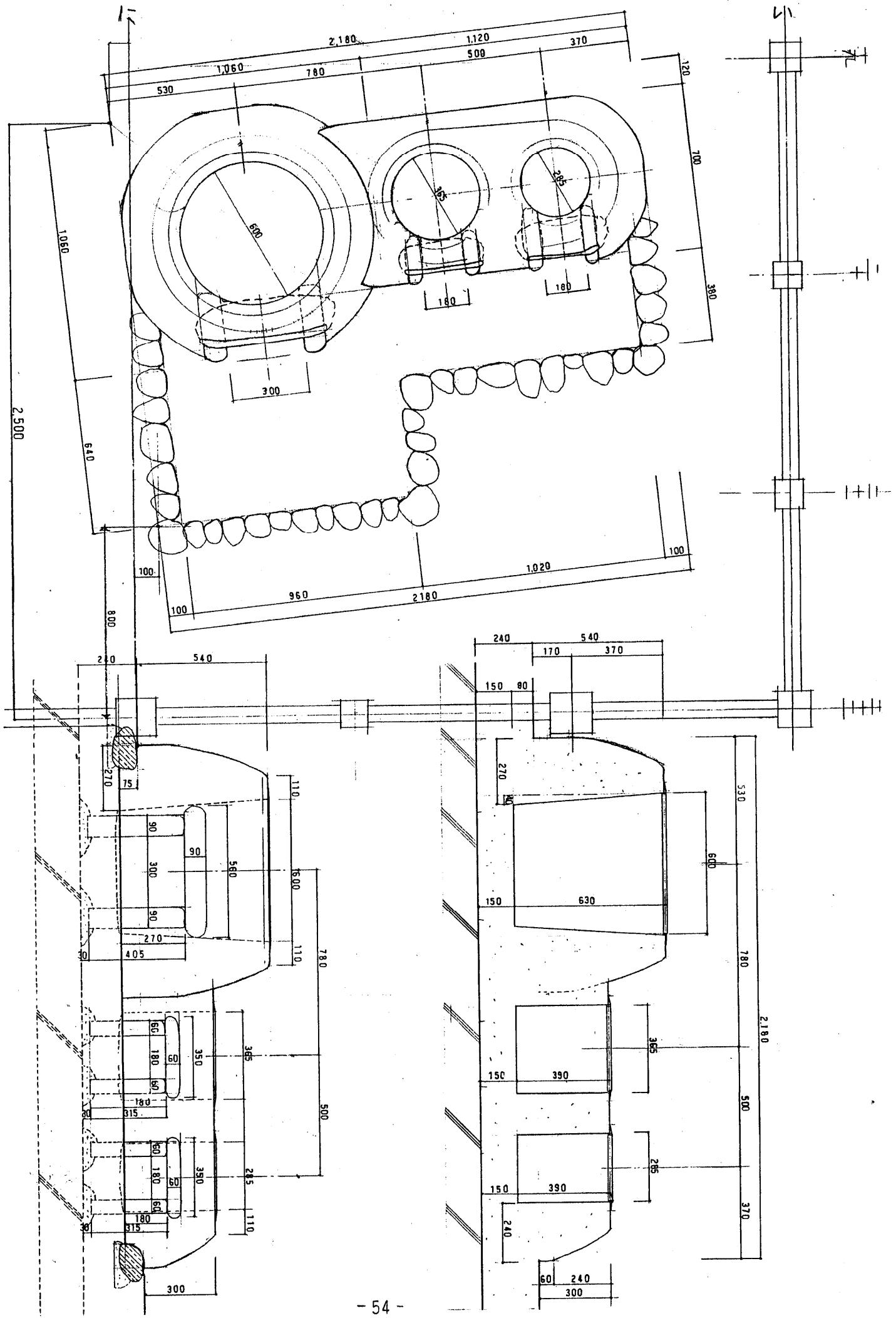
タルキ竹と棟木の取り合い、タルキ竹と野隅木の取り合い部分はいずれもタルキ竹の方を切って突き付けとした。

d. エツリ

エツリは元口径30mm～40mmの真竹を縦に四ツ割りにしたものを使い、間隔はヤナカ竹相互の間に3本の割合で、竹のオモテを内側にし、2分縄でタルキ竹に止めた。



茅屋根断面図



ヌ. 木工事

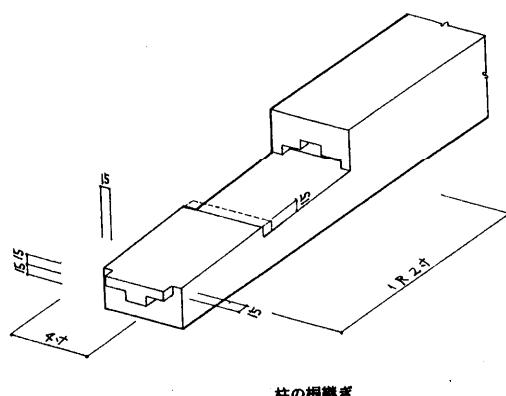
a. 材料

修理材、取り替え材とも旧材の樹種を使用した。杉柱の修理材および取り替え材は赤みの部分だけを用い、秋田産のものとした。

松材は兵庫産の赤松を用いた。

b. 柱の根継ぎ

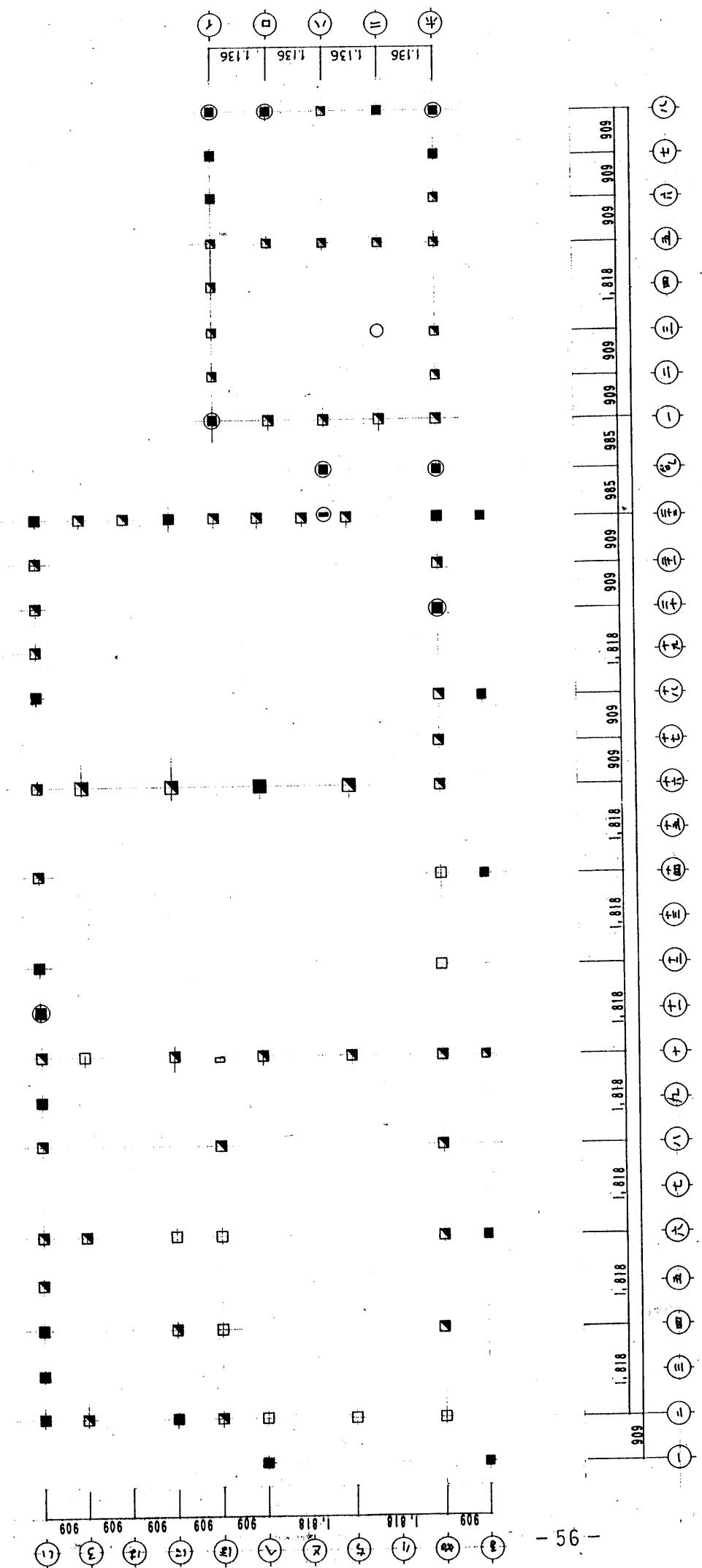
柱の脚部の傷みのあるものは根継ぎ修理を行った、継ぎ手は金輪継ぎを原則にし以下のような継ぎ手を用いた。



柱の根継ぎ

c. 柱材の修理と取り替え

主屋および馬屋柱で根継ぎ修理および取り替えたものは次項の図のとおりである。



□ 蝙蝠の修理の後 古材を再使用

柱状物理量指標

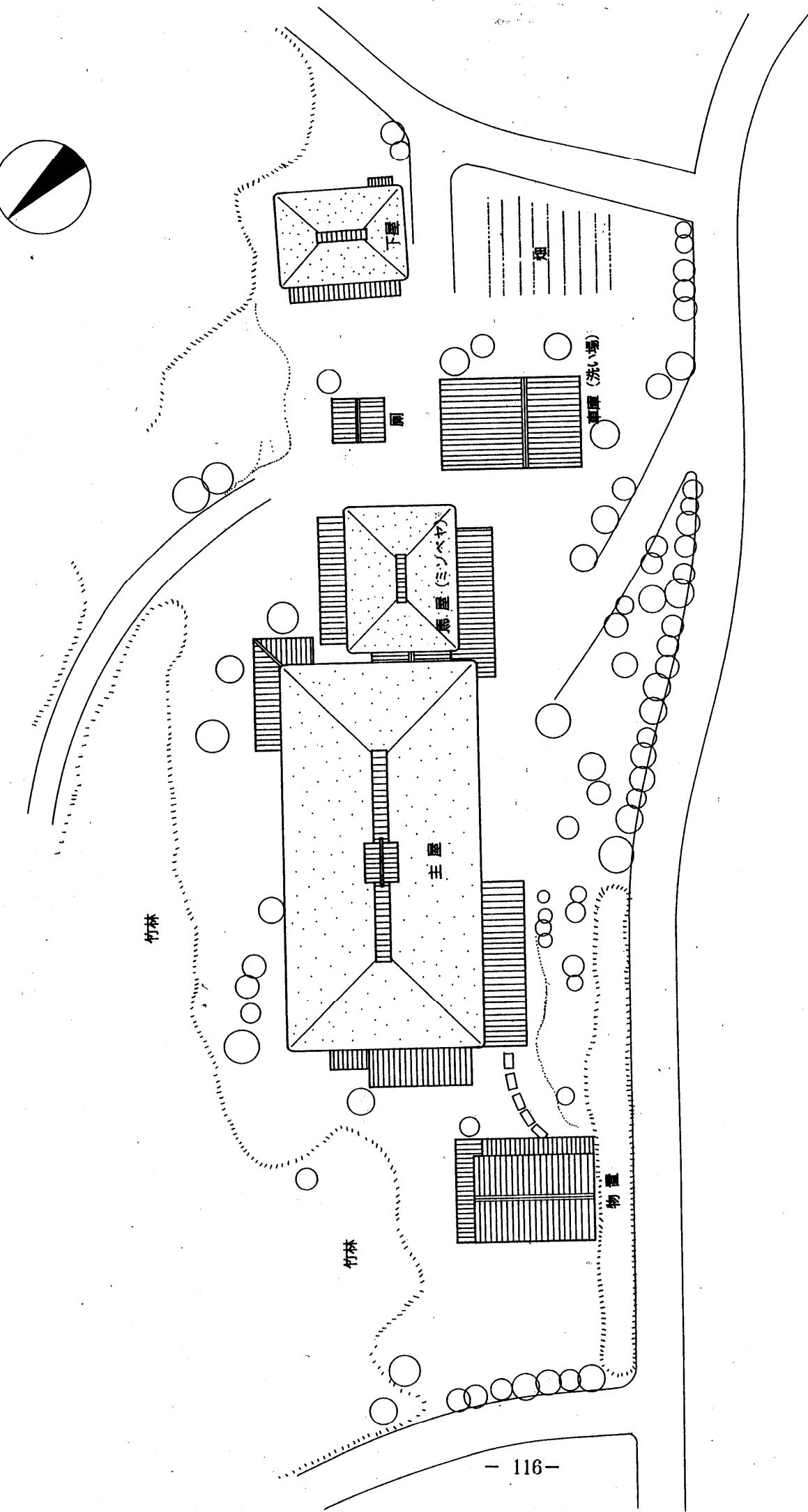
政治小説の歴史

○ 消失していたため新材に取り替えた柱

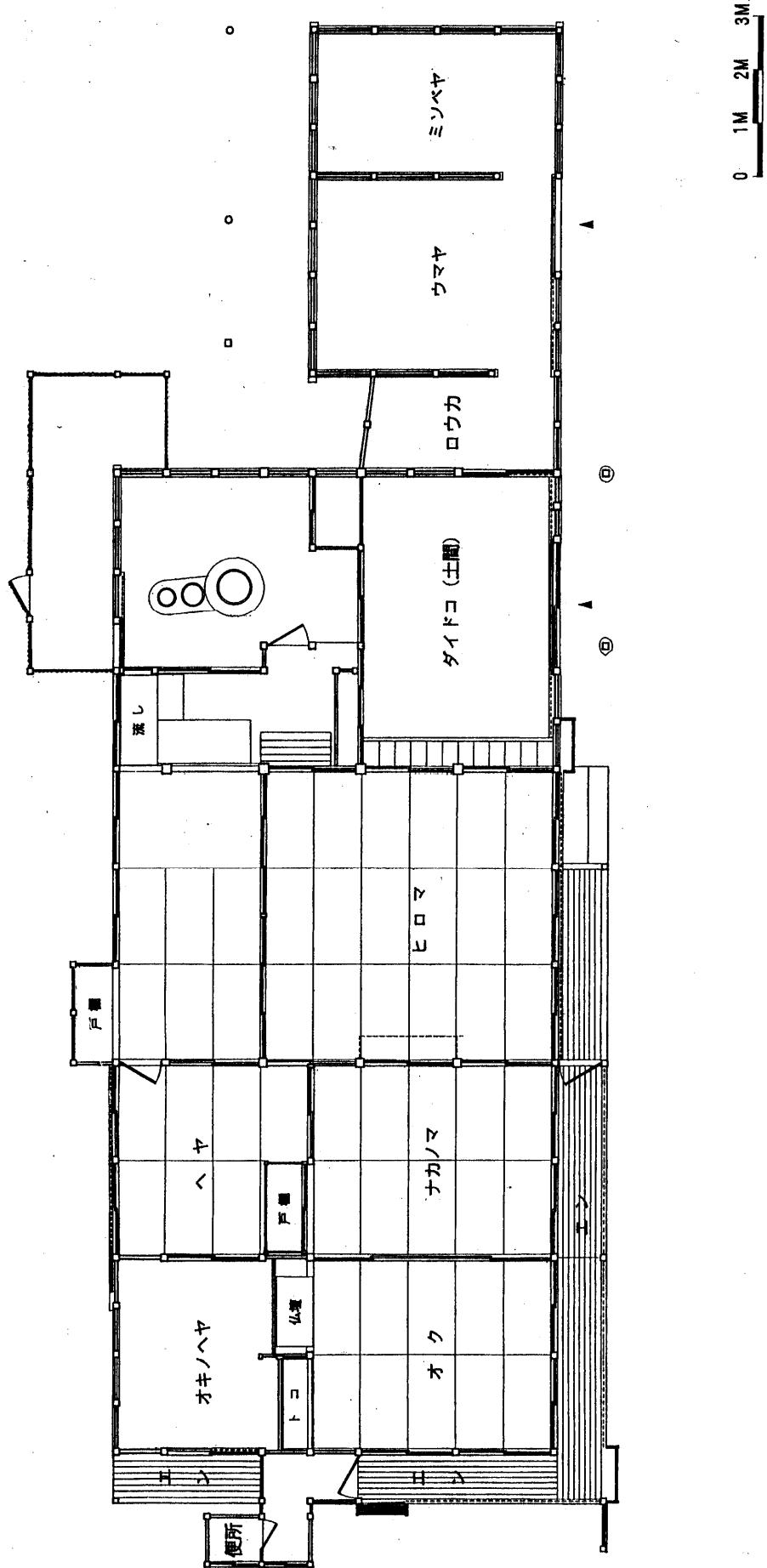
理の共

10M
5M
0 1M

解体前配置図

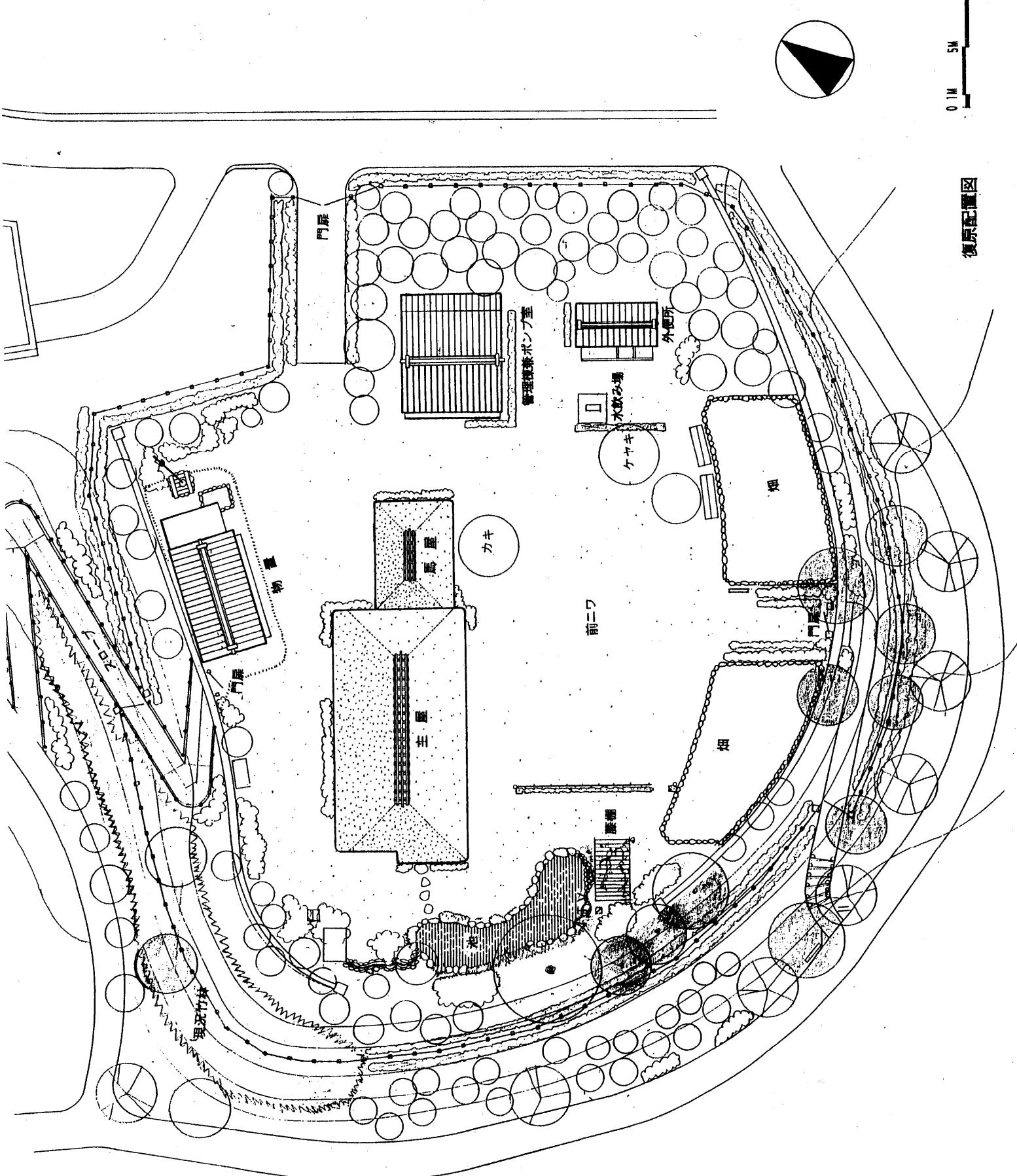


解体前平面図

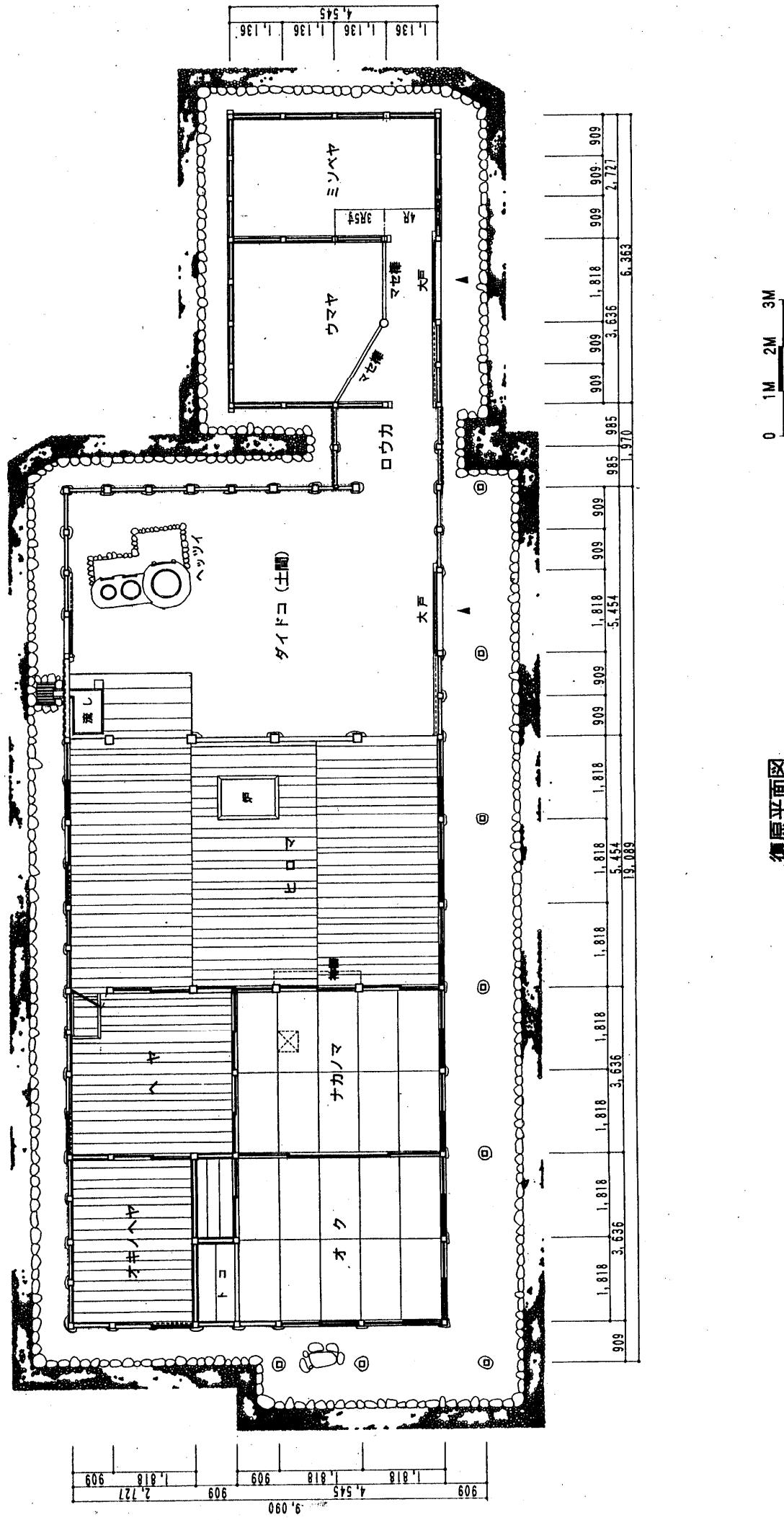


0M 5M 10M

復原配置図



復原平面圖



0 1M 2M 3M

梁行断面図

